

# 羽前の国・椿

## 台沢温泉

# がまの湯

由来記



### ガマの湯 由来

町道椿中線・台沢十支字から西へ約三丁  
M位に入ったところでガマの湯源泉がある  
明治二十甲辰 椿の伊藤きん定で働いて  
いた当時十三・四才の「きん」という女の人が  
発見した源泉で、これが傷・皮膚病に卓効  
ある湯として近郷に聞えた名湯「ガマの湯」  
の起りである。

きんさんが夏草刈りに行き、斧者をつかっ  
ているとき、大きなガマ蛙が怪我をして斤足を  
引きつり涙を流しながら湧き出る泉に  
入ってゆくところを目撃した。



翌日、その場所に行くと見るとガマ蛙はほとんど快復して元気になっていた。家に帰ってこの話をすると伊藤家の主人伊助さんは早速「世の中の人々の為になる事だ」と関係ある長沼清太郎氏と伊藤徳右衛門氏の了解を得てその泉の近くに宿泊所（湯治場）を建てた。

これが昭和三十年迄くまで「ガマの湯」として利用客の絶えなかった建物である。



この湯は傷ばかりでなく皮膚病や 当時多かった「カグチ」（ぶゆに刺されて跡がふくれる 一種の皮膚病）「ウルシカブレ」などに効くことから随分利用客がおり殊に終戦後外地から復員して来た人々が持ち帰った「カリカリ病」（ものすごくカナイ皮膚病）流行の時は湯治に出来ない人々のためにビンに汲んで持ち帰る人もいて 賑わいを見せた。



しかしその後車社会・観光事業の隆盛におおられ  
へんぴな山の鉱泉はすっかりすたれて  
建物も取りはきられ湯だけが湧き  
出ているありさまであった。

その湯を捨てておくのはもったいな  
いと昭和五十三平においで旅館  
の社長山口穂辰が延々  
四・七KMの距りもハイプで  
引いて活用しているのが現在の  
ガマの湯である。

万病に療効あり疲れをいやし  
明白への菜気を大いに養ひ。

発行・ガマの湯いって旅袋

文・画 江袋 裁



## 飯豊 音頭

一、飯豊おろしも和らく春は

里に早苗もすくすく伸びる

飯豊の山 飯豊の山 飯豊の山

米の郷 それ米の郷

二、深い緑の色ます夏は

のどかな牧場に子牛が馳ける

飯豊の山 飯豊の山 飯豊の山

牛の郷 それ牛の郷

三、里にこがねの波うつ秋は

山の味覚もまけずと育つ

飯豊の山 飯豊の山 飯豊の山

山の郷 それ山の郷

四、白一色に輝く冬は

ダムも静かにあしたの希望

飯豊の山 飯豊の山 飯豊の山

ダムの郷 それダムの郷